

留学生相談の特徴に関する一考察

—— 群馬大学留学生センターにおける留学生相談から ——

園 田 智 子

要 旨

本稿は、平成18年度から19年度にかけて、群馬大学で行われた留学生相談について、留学生の属性及び相談内容について分析を行い、その傾向を考察したものである。分析の結果、相談には、日本人学生と共通するものと、留学生特有と思われる相談があることがわかった。さらに、時期によって相談内容に変化があることや、キャンパスごとの傾向などから、今後の充実した相談体制、方策について考察した。

【キーワード】 留学生 学修相談 心身の不調 異文化間的問題

1. はじめに

本学においては、平成18年度後期より、留学生センターに留学生相談を主業務とする教員の配置を行い、留学生の相談、アドバイジングの体制をより強化しようとしているところである。担当教員は、平成18年10月より週に3回、それぞれキャンパスごとに2時間から5時間の時間を割いて相談に当たった。

そのような中、留学生からは、様々な相談が留学生相談室に寄せられた。以下に属性による傾向や内容の分析を通して、今後の充実した相談体制構築に向けた考察を行う。

2. 18年度後期から19年度前期における相談件数

2.1. 月ごとの相談件数

1年間の相談件数は、延べ104件¹⁾で、図1のとおりである。相談者の中には日本人学生、日本人教員の相談も7件含まれている。相談は、複数回の相談を必要とするものと、単回で解決できる問題があった。そのうち複数回の面談は、その内容によって一定時期に集中して相談が行われるケースと、相談の内容によって不定期に何回か来室があるケースがあった。

月別の相談件数

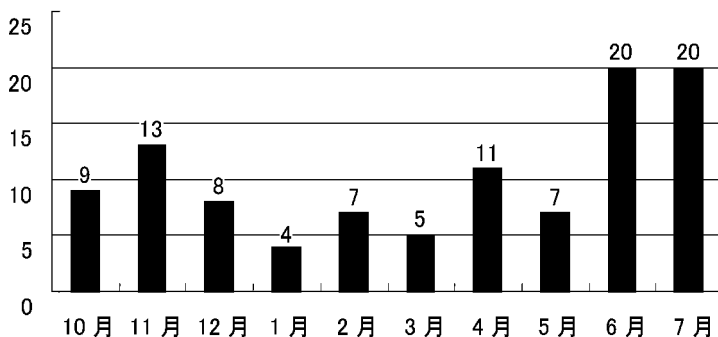


図1 月別の相談件数

2.2. 月ごとの傾向と年間サイクル

10月に新体制で開始した相談業務だが、最終的には年間で100件を超す相談を受けたことになる。なお、これは、初年度のみ分析であるので一概には言えないが、1年を通して相談にもそれぞれの時期特有の傾向があるように思われた。

〈学期開始時と学期終了時（帰国前）〉

グラフを見ると、とくに夏休み前に相談件数が増えている様子が見える。6月、7月の夏休み前の相談件数の増加は、短期留学の学生の帰国前の時期と重なっているためでもある。この時期、留学生の中には、帰国前の不安を訴える留学生もおり、注意が必要である。新学期開始時期の4月、10月にも相談が若干多くなっている。留学生の入学は、学部生は4月だが、研究生や大学院生、交換留学生の来日時期は10月であることも多いため、前期、後期ともにその時期に相談室が利用されやすいことが考えられる。来日時の不安、ホームシック、日本語への不安、履修に関する相談が多いのが特徴である。また、一時帰国によるリバースカルチャーショックに関する相談も見られる。

〈就職相談期〉

また、件数は少ないが、12月前後に急に就職に関する相談が増えた。日本人学生の就職活動が始まる時期であり、留学生の中にも、大学院への進学と就職の間で悩んだり、日本での就職を希望しているものの、情報を収集しきれずに不安を感じている留学生がいることがわかった。なお、19年度前期の後半月に相談件数が伸びているのは、相談員の担当する授業で留学生と接する機会が増したため、相談室へアクセスしやすくなったことも考えられる。

3. キャンパス別相談件数

本学は現在4つのキャンパスに分かれている。留学生センター本部のあるAキャンパスには教育学部及び社会情報学部といった文系学部が、本部から車で10分ほどの距離に医学部及び付属病院のある

Bキャンパスが、さらに本部から1時間はなれた場所に工学部のあるCキャンパスがあり、平成19年度、新たにDキャンパスに工学部の生産システム工学科が配置された。留学生は各キャンパスにおり、中でもCキャンパスは約150名の留学生が在籍している。

3.1. キャンパスごとの相談件数

キャンパスごとに見ていくと、Aキャンパスが、29件、Bキャンパスが15件、Cキャンパスが60件となっており、Cキャンパスにおける相談件数が半数以上を占めている。これは留学生の数から考えると当然であるが、各キャンパスの留学生相談の内容や傾向にはそれぞれ異なった特徴が見られた。

3.2. キャンパスごとの傾向

〈Aキャンパス（文系学部）〉

Aキャンパスでは、交換留学生などの短期留学生の相談が目立つ。入学後のオリエンテーションや日本語クラスで、相談員と留学生が触れ合う場も多く、気軽に相談室を利用していることが感じられる。一方、学内でもその所在がつかみにくい文系の学部留学生、大学院留学生、研究生などの相談は少なく、学部内で問題が顕在化してから相談が持ち込まれることもある。必要な人が必要なときにアクセスしやすい相談室にしていくことが今後の課題であるといえる。

〈Bキャンパス（医学系）〉

Bキャンパスでは、相談件数は少ないが、非常に問題が深くなってから来室するケースが多く、解決が難しい。特に研究室における人間関係に関する相談が多いのも一つの特徴である。このキャンパスの留学生は多くが博士課程に所属しており、1日の生活のほとんどを研究室で過ごしているため、そこでの人間関係をうまく保つことができなくなった場合、研究だけでなく、日常生活や心身の健康、ひいては留學生活の継続も危ぶまれる事態になりかねない。まだ問題が小さいうちに相談室へ来てもらえるよう相談室へのアクセスがよりスムーズになるように考えなければならない。

〈Cキャンパス（工学系）〉

Cキャンパスは、最も相談件数の多かった学部である。相談内容の多くは、日本語学習に関する相談であり、工学部の留学生にとって日本語の問題が一つの大きな問題であることがうかがわれた。さらに、工学部では、近年日本での就職を希望し、実際に就職を実現していく留学生が増加している。その一方で就職活動に挫折したり、就職に踏みきれず、あえて留年を選択する留学生もでてきている。就職支援については、単なるノウハウ的な指導のみではなく、自己分析や企業分析、長期的なライフサイクルを考えることができるようなキャリア支援を今後考えていかなければならないだろう。

4. 属性別相談件数

4.1. 男女別

男性の相談件数が70件、女性の相談件数が34件と、男性の相談件数が女性の倍近くになっている。もともと男子学生の多い工学系での相談件数が多かったためなのか、これについて理由は明らかではない。相談内容にも特徴的な違いがあるとはいえない。ただ、女性の大学院留学生の問題として、妊娠、出産についての問題があることには注意しておく必要がある。特に大学院留学生は、既婚者の割合が高く、結婚や妊娠、出産、子育てと研究の両立に関する葛藤が起こることがある。大学は今後、こういった家族や子供を抱える留学生にどのようなサービスを提供していけるのか、日本人の社会人入学者も今後増えていくことを考えると、一つの将来的な課題であると思う。

4.2. 国別

国別では中国16名、ベトナム5名、台湾2名、韓国2名、マレーシア2名、インドネシア2名、日本6名、その他5カ国各1名の相談があった。全体の留学生数に占める割合からも中国人留学生の相談件数が多いのは当然だと考えられるが、一方で中国に次いで数の多いマレーシアの留学生の相談は少ない。マレーシアからの留学生は奨学金を得ている学生がほとんどであり、宗教が同一であり、一つのコミュニティが形成されているため結束力が強く、日常的な悩みや問題は、ある程度コミュニティ内で解決できているのかもしれない。日本人学生や教員の相談は19年度に入ってから増え、研究指導、チューター活動や、海外留学についての相談もよせられた。

また、大学内、あるいは同キャンパス内に同国の留学生のいない留学生の相談については、件数としては多くないが、長期化することが特徴として挙げられる。同じ国、同じ文化圏からの留学生がいない留学生は母国語で思いきり話し合う機会もなく、孤立しがちな部分があるのではないかと考えられる。

4.3. 学年別

学年別で見ると、本格的な研究室へのエントリーの時期である修士と、博士の研究生の相談件数が多いことがわかる。中でも修士の大学院留学生の数が多い。

日本人大学院生に様々な困難があることが近年とりあげられてきているが(鶴田,2004)、大学院留学生にどのような困難があるのか、調査していくこと、大学院生の実態を考慮した支援も充実させていく必要があるだろう。

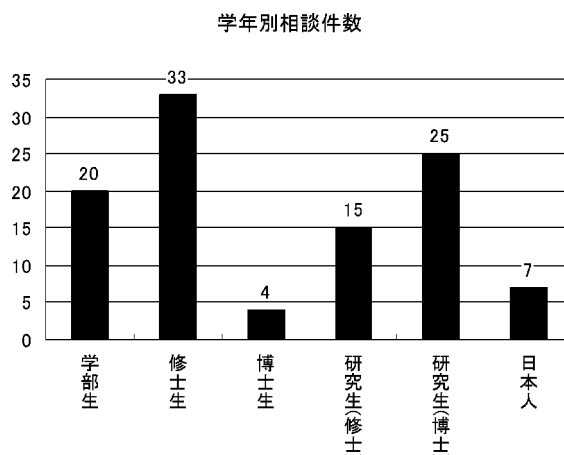


図2 学年別の相談件数

なお、学部学生の相談は、入学直後の4月の時期に集中している。本学に入学したばかりの学生は、まだ友人やネットワークも少なく、教室の場所や履修登録の方法など、手続き的にも慣れていないことが多いため相談室を訪れることが多いことが考えられる。今後はよりきめ細かで、段階的なオリエンテーリングや、留学生の先輩、日本人の交流グループなどと協力して、ピアサポートを入学直後から充実させられるといいだろう。

5. 相談内容の分析

相談内容は、一つの相談にいくつもの相談内容が含まれていたり、話されていることと、実際の悩みが異なっていたりして、単純集計で分析することは難しい。そこで、ここでは、相談内容の記録を、KJ法(川喜田、1967)を用いてカード化し、カテゴリーごとに分類を行った後、その関係性を考察することとした。図3は、相談内容のカテゴリーを5つのカテゴリーに分類したものである。矢印は、一人の相談者の中で関連をもって話されたものを示している。

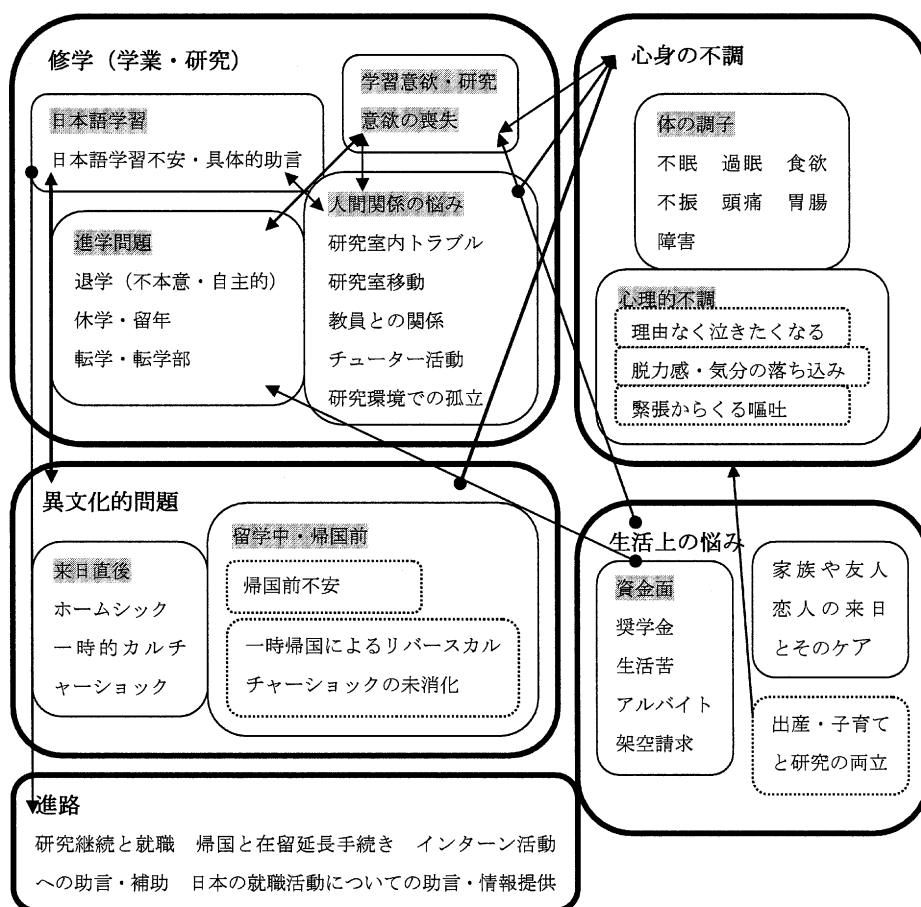


図3 留学生の相談内容

内容を見てみると、日本人学生同様、青年期一般の相談も多い。鳴澤(1998)は、青年期の悩みを、対人関係、修学相談、不安・抑鬱、身体問題、社会生活上の問題などであるとして具体的な事例をもとに分析しているが、それらは5つのカテゴリーにも含まれており、十分留学生にもおこりうる悩みである。ただ、日本人学生と同じような相談カテゴリーであっても、留学生特有の事情が関係していることもある。ここでは、3つのカテゴリーを取り上げて、留学生特有の事情について考察する。

5.1. 学修相談

留学生の中には日本人学生同様、不本意入学²⁾に悩んで相談室を訪れる場合もある。とくにアジア系の学生には親の権力が絶対的な場合もあり、親の希望通りの大学、学部を選択したが、大学生活をおくるうちに葛藤を覚えるということもある。また、自国でインターネットの情報をもとに大学を選んだが、入学後やりたい研究ができないことがわかったということもある。しかし、実際問題として、学部間、研究室間、大学間での移動が日本においては難しいという問題に加え、自国との経済格差が大きいなか、独立生計の傾向が強い留学生にとって、転学、転部は日本人学生にもましてリスクをとまなう決断であり、本人も長期間にわたって悩みを抱える傾向にある。こういったケースは渡日以前からの問題が影響を及ぼしていることもあるため、相談の場では、渡日前からの事情や国の家族との関係を十分に聞く必要がある。

さらに、「学修相談」の中で特に多いのは、日本語の学習に関するものであり、留学生の相談の入り方の一つであると思われる。日本語や日本語学習への不安、具体的な助言を求めるもの、さらに、一見日本語の問題のように見えるが、実は根本的な問題として、進路や、金銭的な問題、研究室での人間関係などの問題を抱えているケースもある。

5.2. 心身の不調

留学生の文化受容の過程と身体的・精神的健康の問題は深くかかわりあっていると指摘されている(井上、2001)が、本学においても、異文化間の問題の相談との関連が深く、また、相談内容の初期に顕著に現れることがわかった。中には単純に体の調子が悪い場合もあるが、多くの場合、体の不調に対する訴えとともに精神的な悩みが訴えられることが多かった。中でも不眠、過眠に関する相談が多い。休み明けなどに生活サイクルが狂ってしまったことが原因と思われるものもあるが、留学生生活のストレスが原因と思われるものもある。とくに人間関係での深い悩みをもって来室する留学生の中には不眠だけでなく胃腸障害、内臓疾患をおこす留学生もいる。身体の不調を相談室に訴えにきていときには、なんらかの精神的な問題のシグナルでもあるということに気をつけていく必要がある。

5.3. 異文化間的问题

留学生特有のものとして、異文化間の問題に関する相談がある。その一つがホームシックである。不眠や食欲不振など体調の悪化につながることもあり、注意が必要である。特に日本語のレベルが非常に低いまま来日した留学生は、来日直後、かなり不便で不安な生活をおくっている。自分の要求を

うまく伝えられなかったり、簡単なことでも尋ねることができなかったりする。自分でやれることが限られてしまい、常に誰かの手を借りなければならないことが多い。また、まわりとのコミュニケーションがなかなかとれずに孤立してしまったり、他人が話していることに疑心暗鬼になったり、自分に自信がなくなったりすることもある。このような場合、個別的なケアとともに、その留学生をとりまくコミュニティを充実させ、集中的、継続的に日本語学習を行うことが重要だろう。

もう一つ気をつけておきたいことは、帰国前不安を訴える留学生についてである。日本での生活や学習を無事修了し、帰国するだけの留学生が、帰国後の就職や学習に関する不安、国の友人との関係に対する不安、一時的な脱力感、過眠症状、日本での友人やネットワークからの離別の不安など、心身の不調や不安を訴えることがあった。このようなケースに対しては、個別のケアに加え、グループカウンセリングや帰国前オリエンテーションも今後考えていきたい。

6. 相談指導体制の整備と今後の課題

最後に、本学における相談体制の今後の課題について以下にまとめた。

6.1. 相談室の広報と相談室へのアクセス

～必要な学生が必要なときにアクセスできる相談室を

まず、留学生相談室への十分なアクセシビリティを確保するという課題がある。必要なときに必要な人がアクセスできるよう広報を広く継続的に行う必要がある。また、留学生の中には、国で、カウンセリングやアドバイジングといった言葉を聞いたことがない学生もあり、「留学生相談」が何をやる場であるのか十分理解されていないことや誤解されていることもある。相談員は機会あるごとに「留学生相談」についてわかりやすく説明するとともに、相談室が担える役割を改めて考えていかなければならない。具体的には就職支援に関するセミナーや、オリエンテーション時の個別カウンセリング、指導教員との連携、留学生の実態調査や、メンタルヘルスに関する調査分析などである。

6.2. 相談体制の連携の強化

～コミュニティの拡大と充実にむけて

斎藤、道又（1998）では、研究センターの分離キャンパスにおいて、介在するスタッフの重要性があげられており、とくに保健管理センター（健康総合支援センター）における看護婦の役割の重要性をあげている。さらに、加賀美（2007）は、包括的支援体制の重要性を述べ、留学生の多様な相談に相談員一人では対応できることには限界があり、社会、文化、集団、個別レベルの融合した支援体制が必要であるとしている。

現在、複数のキャンパスに留学生の在籍する本学においても、相談員自身が積極的に留学生と関係が深い部局や教員との関係性を構築し、相談室の活動と役割を知ってもらうことが重要である。そして、学内外にもそのコミュニティを広げ、支援体制の輪を広げていきたい。具体的には、留学生の就

職支援に関してキャリアサポートセンターとの連携をとっていくことや、修学支援に関しては各部署の留学生係との連携によって、欠席や履修届けの状況、単位取得に関する状況をいち早く確認し、積極的に面談を行い、サポートしていくことも可能だろう。また、メンタルヘルスの支援に関しては学内組織との連携はもちろんのこと、キャンパスごとに学外にもリファー先を確保する必要があり、その点に関しては今後の課題である。

注

- 1) この相談件数は相談室に、予約、来室した学生に対して相談員が行った相談件数であり、Eメールや電話による相談、個別の教員が受けた相談件数は含まれていない。
- 2) 自分の積極的意志に基づかず、不満を抱きながら入学することを指す。アメリカの教育社会学者 M. トロウの命名で、不本意入学の増加が退学・中退につながっていると指摘されている。

参考文献

- 石隈利紀 (1999) 『学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理的援助サービス』誠心書房
- 井上孝代 (1997) 『留学生の発達援助 不適應の実態と対応』多賀出版
- 井上孝代・伊藤武彦 (1998) 「留学生相談の実態と課題—全国高等教育機関の調査から—」『学生相談』19-1, 22-31
- 井上孝代 (2001) 『留学生の異文化間心理学』井上孝代 玉川大学出版
- 加賀美常美代 (2007) 「留学生のメンタルヘルスと包括的支援体制」『留学交流』19-10, 2-5
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中公新書
- 斉藤憲司・中釜洋子・香川克・堀田香 (1996) 「学生相談の活動領域とその焦点—アメリカの大学におけるサポートシステムとの対比から—」『学生相談研究』17-1, 46-60
- 斉藤憲司・道又紀子 (1998) 「分離キャンパスを視野に入れた学生相談活動」『学生相談研究』19-2, 1-8
- 白土悟・権豪与志夫 (1991) 「外国人留学生の教育・生活指導における現状と課題—全国主要大学の大学教員及び事務職員層に対する質問紙調査報告—」『九州大学比較教育文化研究施設紀要』(通号 42), 97-119
- 鶴田和美 (2004) 『学生のための心理相談大学カウンセラーからのメッセージ』培風館, 42-53
- 鳴澤實 (1998) 『こころの発達援助学生相談の事例から』ほんの森出版
- 横田雅弘・白土悟 (2004) 「修学・生活問題に対するアドバイジング」『留学生アドバイジング 学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版, 155-192

A Study on feature of consultation for international student

SONODA Tomoko

In this study, it is analyzed that the tendency of consultation for international student by the consultation record of Gunma University from 2006 to 2007. As a result, it was clarified that there are common consultation in youth as well as Japanese student, and, there are feature consultation to the international student. In addition, it is considered the future system of the advising for international student in Gunma University.